

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 20 日現在

機関番号：11501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2014

課題番号：25750269

研究課題名(和文)現代体育論を起点とする「身体的な教育」に関する系譜学的研究

研究課題名(英文)A genealogic study on education of human body: considering the discussions of physical education in modern as the starting point

研究代表者

佐々木 究 (SASAKI, Kyu)

山形大学・教育文化学部・准教授

研究者番号：30577078

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：我が国の体育学領域には、「体育とはなにか」という根深い問いがあり、多くの回答となる議論を見ることができる。本研究の目的は、この問いを巡る一連の議論を整理・分析することによって、暗黙的にあれ、それらに通底する思想的な基盤を浮き彫りにすることにあつた。

原著論文などのかたちでまとめられた本研究の成果は、今後「体育」の用語的な意義を遡及的に追求するための最初の礎石となる。

研究成果の概要(英文)：In the field of study on Physical education, there is a profound issue 'what is Physical education?' and, we can see many discussions to answer this. The purpose of this research is to reveal the base(s) of thoughts in common to the discussions, by surveying and analysing them.

The results of this research which are published in the form of papers is the first milestone for pursuing retroactively the literal meanings of Physical education.

研究分野：総合領域

キーワード：体育 原理論

1. 研究開始当初の背景

本研究代表者は、以前の研究において、18世紀フランス語圏における「体育 *éducation physique*」の意義を実証的に検証し、18世紀が、いわゆる「近代体育」の揺籃期であり、現代の体育のあり方に対しても大きな影響を及ぼしているとの示唆を得ている。当代における「*éducation physique*」は、「体育=身体的な教育」という現代のわれわれの一般的な理解とはかなり異なる意義を帯びていたと考えられるのであり、用語上の観点からして「体育」は、18世紀以降、その意義を転換させていると推測される。しかし、現代に至るまでの体育の意義の変遷については、今なお十分な検討が行われておらず、体育の出自・自己同一性を巡る議論には、歴史的・実証的な観点で欠落が認められる。

「体育」における「身体的な教育」という含意は歴史的・社会的な文脈を離れたものではなく、特定の時代に、特定の社会的な条件のもとではじめて定立・展開してきたと考えられる。しかし、そうした意義の転換点や変遷については、これまでのところ、その存在の可能性さえ考慮されていない。「身体的な教育」としての「体育」の意義は、どのような歴史的・社会的な条件のもとで成立したのか。そしてそれは、いつのことで、いかなる事情によって可能となったのだろうか。こうした問いが、浮かび上がってきている。

2. 研究の目的

本研究代表者が最終的に目指しているのは、用語としての「体育」が「身体的な教育」という含意を帯びていく過程を詳らかにすることであり、これが本研究の根本的な動機となっている。具体的には、「身体的な教育」の意義が成立した時期や固有の事情を特定し、それが、どのような教育観お

よび身体観を基盤としたのかを問うことになるだろう。

そのための最初の手続きとして、「体育」の不可欠の要件と目されている「身体」と「教育」に着目した文献学的な検証が必要であるだろう。一般に、教育論や身体論は、体育に言及することなくそれぞれ独自に成立しており、「身体的な教育」という領域が画定されること、またそれが自立的であることに論理的な必然性はない。つまり、体育の意義を巡る研究では、本来、体育の成立を自明視するのではなく、それを支える教育観および身体観を問うことから始められねばならないのである。この事情は、本研究でも同様である。

しかし、もちろん現状では、「身体的な教育」としての「体育」は、その成立時期が未画定であり、ただちにその背景を問うていくことはできない。したがってまずは、前提的な作業として現代の体育論を起点とする遡及的な研究、すなわち「体育」の歴史を、現代を起点として遡及的に探求することが必要となる。「身体的な教育」の成立事情は、身体観と教育観を二つながらの視座として遡行的に追求していくことで始めて明らかにされうるはずである。

以上の経緯を踏まえ、本研究の目的を、「身体的な教育」としての「体育」の成立事情を明らかにするべく、その前提的な作業として、現代日本の体育論を対象に、行論の背景にある教育的・身体的な思想的な基盤を文献学的な手続きをとおして抽出・検討することとする。もちろん、我が国における「体育」という用語の成立・流通事情においては、「教育」の含意をも欠落させるような多義化の過程も指摘されている(木下秀明 1971 『日本体育史研究序説』)。しかし、それでもなお「身体的な教育」という含意は今も有意義であるだろう。本研究では、「体育」を「身体的な教育」と認め

る現代の議論を主な対象として、そうした主張を支える背景の論理を抽出・整理して、「体育」の意義が転換する時期を追求していく。

3. 研究の方法

我が国の体育学領域には、「体育とはなにか」という根深い問いがある。本研究で注目したいのは、そうした、体育の自己同一性を巡って行われてきた様々な議論である。代表的なものとしては、たとえば以下のものがある。

- 1) 前川峯雄 (1970) 『体育原理』
- 2) 篠田基行 (1980) 『体育思想史』
- 3) 川村英男 (1985) 『改訂体育原理』
- 4) 佐藤臣彦 (1993) 『身体教育を哲学する』

現状では、これらの著作を相互に関連づけた検討はもちろん、個別的にもその理論的妥当性についてはほとんど検証されていない。本研究に先だって、すでに本研究代表者らは、複数の観点からの分析を進めつつ、全国規模の学会大会におけるシンポジウムなどで主題的に検討を行ってきた。本研究期間内では、これらの著作について、さらに分析を進め、同時に著作相互の理論的な関係性や主張の異同についても整理することによって、これらの背景にある身体観・教育観の抽出・分析を試みる。その際、他の研究者との連携・協力関係を構築・強化し、専門的な知見の提供を受けることによって多角的な観点から分析を進めていく。

なお、上記シンポジウム企画は本研究期間内でも継続予定であり(平成26年度まで)、主旨が一致する部分についてはその場での公表を行う。

4. 研究成果

上述のように、本研究に先だって、すでに研究代表者らは全国学会大会において関係する主題でシンポジウムを行っている(2012年:日本体育・スポーツ哲学会第34回大会)。テーマは「体育哲学を再考する」であり、提案趣旨(副題:「体育原理論」のこれまでとこれから)を作成するとともに(分担)みずからシンポジストとして発表を行った。

本研究の固有の成果としては、1)同シンポジスト発表に加筆・修正を加えた原著論文がある。同稿では、現代の代表的な体育論として佐藤臣彦著『身体教育を哲学する』(以降、「佐藤体育論」とする)に着目し、論理内在的な観点から検討を行い、その妥当性や有効性を検証した。同著作では方法論的な視座として三つの「カテゴリー装置」が設定されているが、これらと、そこから導かれる議論の整合性について検証した。

「カテゴリー装置」は、著作の根幹をなす分析の枠組みであり、中心的な主張はそこから演繹的に展開されている。しかし佐藤の議論では、「関係性」カテゴリーに関する議論と「超越性」カテゴリーに関する議論の間に、一定の理論的な不整合が認められた。「関係性」の議論を推し進めると「超越性」の成立が危うくなり、逆もまたそうである。したがって今のところ、佐藤体育論を十分な確実性を持った体育の原理論として認めるためには、留保が必要である。

佐藤体育論は現在までに方法論として援用される事例が多く、かなりの参照頻度があるだろう。しかし、その内実についてはこれまでに十分な検証作業が行われておらず、このことは、他の体育論に関する検証作業の不十分さをも仄めかしている。

続く成果は、2)友添秀則著『体育の人間形成論』を題材に、佐藤体育論の受容の

あり方を検討したものがあ。上述のように佐藤体育論は、他の議論において参照されたり方法論として採用されたりしているが、その理論的な射程や援用の妥当性については、これまでほとんど検証されたことがなかった。そこで、本稿では友添の著作を対象として事例研究的な検証作業を行った。

本稿での検討によって、友添の著作では佐藤の体育論が方法論的に用いられていることが改めて確認されるとともに、この定義を用いることから一定の問題性が導かれていることが明らかとなった。この帰結は、友添が自らの議論から「身体形成」についての言及を除外したことをも根拠とする複合的なものであり、体育(科)の意義を確立しようとする自身の著作の主旨に反するものである。すなわち同著作の論理は、学校教育制度に体育(科)を位置づけることの正当性を強化しないだけでなく、その存在意義についても、新たな疑義に直面させてしまうものである。

本稿における具体的な結果は以下の通りである。すなわち、体育に「人間形成」という大きな教育的目標を付加することは可能であり、かつ意義深い。しかし、それが体育という固有の営みと両立しうるかどうかは自明のことではない。また、体育概念は佐藤によって人間存在とともに普遍的なものと主張されているが、このことは体育が人間の営みのあらゆる局面でつねに生起しているということの意味しない。「身体形成」は体育と「人間形成」をつなぐ鍵概念であり、佐藤に依りながら「体育の人間形成」を有意義に論じるためには、これについての議論は回避することはできないはずであった。友添の著作において佐藤体育論は十分な有効性をもって用いられているということではできず、上述の不都合は、今後「身体形成」を論じることによって積極的

に解消される必要がある。体育原理論に関する分析の欠如は、このような不首尾を招く可能性がある。

また、3)前記のシンポジウムは、2013年、2014年にも引き続いて行われた。副題は、2013年が「体育原理論の応用可能性」、2014年は「新たな議論の可能性の探究」である。両年とも本研究代表者は提案趣旨作成および当日の司会進行を務め(いずれも分担)、近接する他領域からも演者を招き、発表を行った。前者ではいわば体育哲学分野の外側からの視点を導入することで、「体育とはなにか」という問いの相対化を試み、後者では現代体育の思想的な基盤となることが期待されている、あるいは、すでにそうである思想について、改めてその理論的な可能性を検討した。

さらに、4)現在投稿中の論文(総説(査読有り):5月12日付けで受理:体育・スポーツ哲学研究に第37巻第1号に掲載予定)では、戦後以降に行われた「体育とはなにか?」という問いを巡る議論を概観し、その主張内容を一定の観点から整理するとともに、そうした議論における盲点を指摘しようとした。

これまでに体育の自己同一性に関する議論は多く行われ、さまざまな定義が試みられている。そこで本稿では、分類のための枠組みを設定し各議論を整理し、他ならぬその定義が体育として正当化される内的な論拠となる主張を抽出した。その上で、それぞれの根拠の特性に基づきいくつかの理論的困難を導出し、共通に認められる研究上の盲点をも指摘した。

これらの議論に明らかのように「体育」は、歴史的・社会的に多義的である。そこでなんらかの意義を唯一のものとして正当化すると、他の意義が不当なものとして視界から外れることになる。事実、これまで体育の歴史は、あらかじめなんらかの定義

がたてられ、これに基づいて叙述されてきたが、こうした場合、当然ながら他の意義での「体育」は見落とされている。こうして、ある時代ある社会でどのように体育が捉えられていたか、といった歴史的・個別的な事実は見過ごされてしまうのである。本稿では、このことを体育哲学研究上の盲点として提示した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3件)

- (1) 佐々木究、体育原理論批評、体育・スポーツ哲学研究、査読有、第37巻第1号、2015、掲載予定(受理：5月12日付け)
- (2) 佐々木究、友添秀則著『体育の人間形成論』の批判的検討-佐藤臣彦著『身体教育を哲学する』を方法論とすることの問題性-、体育・スポーツ哲学研究、査読有、第36巻第2号、2014、pp.109-121
- (3) 佐々木究、田井健太郎、「体育原理論」の批判的検討-佐藤臣彦『身体教育を哲学する』に着目して-、体育・スポーツ哲学研究、査読有、第35巻第1号、2013、pp.21-29

〔学会発表〕(計 4件)

- (1) 田井健太郎、佐々木究、シンポジウム提案趣旨「スポーツ実践の思想(2年目)-スポーツ実践のパフォーマンス」、2014年8月27日、日本体育学会第65回大会体育哲学専門領域シンポジウム、岩手大学
- (2) 田井健太郎、佐々木究、シンポジウム提案趣旨「体育哲学を再考する(3年目：最終)-新たな議論の可能性の探究」、2014年8月20日、日本体育・スポーツ哲学会第36回大会、筑波大学 筑波キャンパス 春日エリア
- (3) 田井健太郎、佐々木究、シンポジウム提案趣旨「スポーツ実践の思想(1年目)-スポーツ実践の現在」、2013年8月30日、日本体育学会第64回大会体育哲学専門領域シンポジウム、立命館大学びわこ・くさつキャンパス
- (4) 田井健太郎、佐々木究、シンポジウム提案趣旨「体育哲学を再考する(2年目)-「体育原理論」の応用可能性-」、日本体育・スポーツ哲学会第35回大会、2013年8月18日、明治大学駿河台キャンパス

6. 研究組織

(1)研究代表者

佐々木 究 (SASAKI KYU)